

ライラック ‘アナベル’ の促成開始時期

佐藤武義・西村林太郎*・工藤則子**・佐藤裕則***

(山形県農業総合研究センター園芸試験場・*山形県庁・**山形県村山総合支庁・***山形県最上総合支庁)

Forcing Time of *Syringa* ‘Annabel’ Tree after Encountering with Natural Low Temperature

Takeyoshi SATO, Rintaroh NISHIMURA*, Noriko KUDO** and Hironori SATO***

(Yamagata Integrated Agricultural Research Center Horticultural Experiment Station,

*Yamagata Prefectural Government Office, **Murayama Branch of Yamagata Prefectural Government Office,

***Mogami Branch of Yamagata Prefectural Government Office)

1 はじめに

ライラック ‘アナベル’ はHawkins, R. F.によって *Syringa oblata* subsp. *Dilatata* Rehd. から育成された早生品種¹⁾であり、*S. vulgaris*の栽培品種と比較して樹勢の旺盛な点が特徴の一つである。そのため、春期の自然開花期に切り枝収穫を行なった後でも新梢の伸長量は大きく、また、花芽の着生が良好なことから、連年、切り枝収穫が可能である。本品種は山形県内の平坦部においては、自然条件下では4月下旬から5月上旬にかけて開花する。淡桃色の花色は季節感を醸成させ、また、多くの花材との彩りの調和が美しいため、フローリスト等の流通関係者からは早春期からの出荷が期待されている。一方、他の落葉性枝物花木と同様に、促成栽培を行なう際の花芽の休眠覚醒には低温遭遇が必要となるが、これまで自然条件下で低温遭遇させた場合の促成開始の前進限界期についての知見は少ない。そこで、山形県におけるライラック ‘アナベル’ の普通促成作型の開発を目的に、ボックス定植樹を供試し、自然条件下で低温遭遇させた後、順次加温室に入室を行い、萌芽、開花時期および切り枝品質について検討した。

2 試験方法

(1) 試験1：2005年度

ライラック ‘アナベル’ の挿し木由来の2年生ポット苗を2001年4月に畑土と籾殻堆肥とピートモスを容積比1:1:1で混合した培養土を用い、直径30 cm×高さ35 cmの不織布ポット(培養土量: 20L)に1樹ずつ移植した。移植後、不織布ポットを露地圃場に深さ約20 cm埋め込んで樹を養成した。2003年11月に不織布ポットを掘り上げて、底面48 cm×32 cm、高さ30 cmのボックスに入れ、さらに、乾燥防止のため不織布ポット周囲に籾殻堆肥を深さ約22 cm充填した。2005年4月に地際から約10 cmの高さで一斉に切り戻し後、基肥(g/L)としてN:P₂O₅:K₂O=0.30:0.30:0.36を施用し、新梢を着花枝として仕立て、露地圃場で置床管理した。このボックス定植樹を11月28日から12月12日まで7日間隔で最低20℃(昼温)/最低13℃(夜温)

の温室に順次入室し、萌芽、開花時期および切り枝品質調査を行なった。促成開始から萌芽までの日数を萌芽所要日数、収穫までの日数を到花日数とした。収穫は頂花房の小花が50%以上開花した時を目安とし、着花枝の基部から切り取り、収穫日として表した。試験規模は1区2樹とした。

(2) 試験2：2006年度

試験1と同じ養成年数のボックス定植樹を供試した。2006年3月に地際から約10 cmの高さで一斉に切り戻し後、試験1と同様に施肥し、着花枝を仕立てた。このボックス定植樹を12月3日から31日まで14日間隔で、試験1と同様の温室に順次入室し、調査を行なった。試験規模は1区4樹とした。

(3) 試験3：2007年度

2005年に挿し木・発根させたポット苗を翌春に露地へ定植し、2007年12月まで養成した樹を試験1と同様の組成の培養土を用い、底面20 cm×20 cm、高さ37 cmのボックス(培養土量: 15L)に1樹ずつ移植して供試した。2007年12月15日から30日まで7~8日間隔で、2008年1月15日から4月15日まで13~19日間隔で試験1と同様の温室に順次入室し、調査を行なった。試験規模は1区2樹とした。

3 試験結果及び考察

(1) 試験1：2005年度

入室からの萌芽所要日数は12月12日区が25日と最も短く、次いで12月5日区が43日となり、11月28日区は75日と長かった(図1)。入室からの到花日数は、12月12日区が41日と最も短く、次いで12月5日区が59日となり、11月28日区は87日と長かった。到花日数の区間差は、萌芽所要日数の影響が大きく、萌芽から収穫までの日数には大差がなかった。収穫日は、12月12日区が1月21日と最も早く、次いで12月5日区が2月2日となり、11月28日区は2月23日と遅くなり、促成開始時期の順にはならなかった。切り枝品質については、12月12日区では花房の伸長が良好であったが、11月28日区と12月5日区では劣った。そのため、商品枝率は12月12日区が78%と高かったが、11月28日区と12月5日区はそれぞれ9%、19%と低かった(データ略)。

(2) 試験2：2006 年度

萌芽所要日数は12月31日区が11日と最も短く、次いで12月17日区が19日となり、12月3日区は40日と長かった(図2)。到花日数は、12月31日区が28日と最も短く、次いで12月17日区が38日となり、12月3日区は60日と長かった。到花日数の区間差は、萌芽所要日数の影響が大きく、萌芽から収穫までの日数には大差がなかった。収穫日は、12月17日区が1月24日と最も早く、次いで12月31日区が1月28日となり、12月3日区は2月2日と遅くなり、促成開始時期の順にはならなかった。切り枝品質については、12月17日区と12月31日区では花房の伸長が良好であったが、12月3日区では劣ったため、商品枝率は12月17日区と12月31日区がそれぞれ82%、95%と高く、12月3日区は36%と低かった(図3)。

(3) 試験3：2007 年度

2007年12月中旬以降の促成開始では、萌芽所要日数は12月30日区が11日と最も短く、次いで12月23日区が16日、12月15日区が20日となった(図4)。到花日数は、12月30日区が31日と最も短く、次いで12月23日区が36日、12月15日区は40日と長かった。到花日数では、萌芽から収穫までの日数には差が認められなかった。収穫日は、12月15日区が1月24日と最も早く、次いで12月23日区が1月28日となり、12月30日区は1月30日と促成開始時期の順に早くなった。切り枝品質は、いずれの入室日であっても花房の伸長に問題なく、商品枝率が12月15日区、12月23日区、12月30日区において、それぞれ79%、90%、94%と高かった(データ略)。

2008年1月中旬以降の促成開始では、萌芽所要日数は1月15日区から2月2日区までは9日と短くなり、2月16日区から3月15日区では6~7日とさらに短くなった。到花日数は、2月2日区までは19~21日と短くなり、2月16日区からは3月15日区では15~16日さらに短くなった。収穫日は、促成開始時期の順に早くなり、1月15日区は2月14日となり、その後の促成開始時期4月15日区まで、順次に収穫となった。切り枝品

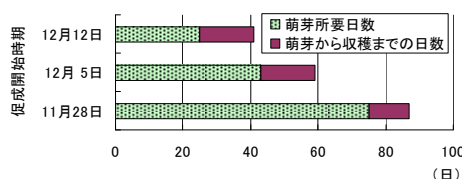


図1 促成開始時期と萌芽所要日数および到花日数(試験1)



図3 促成開始時期と開花状況(試験2)

左から12月3日区、12月17日区、12月31日区

質は各区とも良好であった(データ略)。

これまでライラックの自発休眠については、勝木ら²⁾によって *S. vulgaris* の栽培品種 ‘Mme. Lemoine’ を供試した報告があり、12月下旬に解除すると考察されているが、本研究で供試した ‘アナベル’ では12月中旬となり、‘Mme. Lemoine’ と比較して早期に解除される結果となった。また、勝木らの報告では、12月下旬の促成開始時期までの8℃以下の平均気温経過日数が51日に対して、本研究で供試した ‘アナベル’ では37~41日と10~14日短かった。このことから、ライラックにおいてもサクラ³⁾ などの促成栽培と同様に、休眠覚醒に必要な自然低温遭遇量に品種間差があり、安定生産と加温コスト軽減を図るうえで、品種に対応した促成開始時期を把握することが重要と考えられた。

4 ま と め

山形県におけるライラック ‘アナベル’ の実用的な促成開始の前進限界期は、促成開始頃に商品性の高い切り枝が収穫できる12月中旬と考えられ、到花日数は36~41日となる。また、12月下旬以降の促成開始では到花日数は約30日、1月中旬以降の促成開始では30日以下と短くなることが明らかとなった。

引 用 文 献

- 1) Fiala, John L. 1988. Lilacs, the genus *Syringa*. pp101
- 2) 勝木謙蔵, 小野恵二, 布宮 徹, 三浦孝雄, 大場裕子. 1978. ライラックの切花促成に関する研究(第1報) 花芽の生態と休眠打破効果について. 園学要旨 昭53秋: 298-299
- 3) 佐藤武義, 高橋佳孝, 西村林太郎, 佐藤裕則, 小野恵二. 2005. サクラ ‘啓翁桜’ の早期促成における温湯処理併用によるジベレリンおよびシアナミドの休眠打破処理効果. 山形県園芸研究報告 17: 65-73

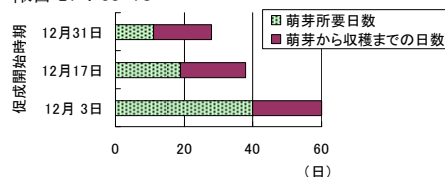


図2 促成開始時期と萌芽所要日数および到花日数(試験2)

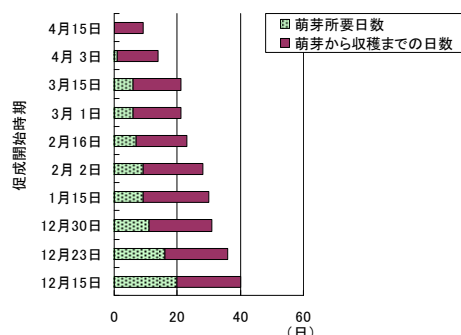


図4 促成開始時期と萌芽所要日数および到花日数(試験3)